



松本紀子先生のこと

学園主松本紀子先生には、去る4月28日、横浜市青葉区のケアハウスで静かに天寿を完うされました。6月4日の学園葬には、学内外たくさんの方々から献花、お参りをいただき、心から感謝申し上げます。人と交わり、人と語り、人と楽しむのが好きな人でしたので、さぞ喜んでくれていることと思います。

私が初めてお目にかかったのは、1980年の5月のゴールデンウィークの頃だったと思います。岩瀬キャンパスの東の端^{はし}にあった松本邸を、夕方近くだったでしょうか、お訪ねした時、白い半袖の、薄いブルーのラインの入ったクルーネックにブルグレーのスカートといった軽快な装いで、「今、ソロプチミストの会から戻ったところで」と、玄関で気さくに迎えて下さいました。それ以来、公私にわたり、43年のお付き合いということになります。

思い出は、数え切れないほどありますが、私がバーゼル大学に留学中、春と夏、我が家に長逗留してくれたことも。大学見学は元より、音楽学へのご関心からヨーロッパ有数のバーゼル音楽院を訪ねたり、北方ルネサンスのスーパー・スターのエラスムスが眠る大聖堂でバッハを聴いたり、また家内と2人でチューリッヒ湖畔のオペラハウスへ「トスカ」を観に出かけ、夜遅く楽しそうに帰ってきたこと、週末のドライブ旅行に立ち寄ったビール湖では、細長く突き出た半島を、かつてルソーが『孤独な散歩者の夢想』を書いた修道院の跡がある突端まで、黄色い花の咲く小道をみんなで脚を棒のようにして6、7キロも歩いたこと、招かれた教授宅では、紀子先生からスイス民謡と聞かされて、「おおブレネリ」を家族で合唱させられたこと、みんな忘れ難い思い出です。

何方もご存知の明るいお人柄については勿論のことですが、その豊かな感性と柔軟な知性は、その後一緒に仕事をさせて頂くようになって、ますます実感するところとなるのですが、何時も、理にばかり奔^{はし}るのではなく、人を一瞬の裡^{うち}に得心させてしまう、そんな天賦の才能をお持ちの方でした。

この大船キャンパスの開設は、天地人相俟^{あいま}って初めてよく成し得たことですが、紀子先生でなければ、そもそも肝心の土地譲渡の話も無かったのではないかとさえ思います。大きな仕事になればなるほど、その仕事をめぐる利害もまた錯綜するものです。私などは、なまじ研究職に身を置いたものですから、正直よくよく考えれば賢^{さか}しらな理屈や、陰に危うい落とし穴が潜むもっともらしい客観主義に惑わされそうになったりするところがありましたが、そんな時、直感力の優れた方でした、いともあっさりとして最高の結論を、しかも一言で鮮やかに導き出すのです。私も、ハツとして、「そう、それでいいんだ」と、気づかされたことが

一再ならずでした。奇しくも創立60周年に当たる2003年4月19日の開設式典の後、ご出席頂いた関係団体にお礼に伺った時、長年日本の私学人をご覧になってこられた、私の父とも懇意だった旧知の方がこう言ってくれました。「いや、お宅の学長は、なかなかの女傑だねえ」と。そんなリーダーを頂く大学に移ったことを、嬉しく感じたものです。

大正13年2月11日、ご自身のお名前の由来ともなった、当時の紀元節の生まれでしたので、白寿、享年99歳。大正・昭和・平成・令和と、前半生は戦争と戦後の混乱の時代を生き抜き、学祖・学父の跡を継ぎ、ご自身述懐なさっているように、眠れぬような心労を重ねながら、幼稚園から大学院までの一貫教育の総合学園を育て上げて下さいました。

理事長・学長・学園長職を勇退した後も、学園主として学生への講演、合唱グループ「音楽の森」の皆様との交流、都立竹早高等学校同窓会長や社会福祉法人清和会理事の務め、今年で48年に及んだ国際ソロプチミストとしての活動、日本を代表するピアニストの深沢亮子さんや、花房晴美・真美さん姉妹との二階堂コンサート、そしていよいよ97歳で入居したケアハウスでは、スタッフの皆様の懇切な介護をいただき、入居者の方々と音楽を楽しみ、どこにあってもユーモアとウィットに富んだ会話をリードし、多くの方々が「女性の生き方のロールモデルとなる見事な人生だった」と言って下さいます。

「今度これをやろうと思っているのですが、どう思いますか」。

「あらいいわね。楽しみにしているわ。でも見られるかしら」。

「いやぁ大丈夫ですよ」。

そんな言葉を楽しく交わした日々も、過去のもので、私には、報告する人がもう誰もいなくなってしまうました。

これは、愛する者を遺す誰もが抱く願いでしょうか、晩年紀子先生が、曾孫たちの成長する姿を眺めながら、よく口にした言葉です。

「この子たちが大きくなった時も、戦争のない、平和な時代であってほしいわね」。

[>前のページへ戻る](#)